

**2018年度摂南大学
外部評価結果報告書**

**2020年3月
摂南大学評価委員会**

総 評

学長 荻田 喜代一

近年、大学における内部質保証システムの強化が求められている。すなわち、大学が自ら掲げる目標に向けて教育研究活動を行い、その成果を定期的な自己点検・評価を通して大学の自律的な改革（PDCA）サイクルを確立することによる質保証である。特に、「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー、DP）、「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー、CP）及び「入学者受入れの方針」（アドミッション・ポリシー、AP）の三つのポリシーに基づく大学教育の質保証が求められている。

本学では、教育の質保証の観点から、『学修成果の可視化』を目的として2018年度には各学部・学科・コースにおけるDP達成度のアセスメント方法について自己点検し、外部評価者による第三者評価を受けた。本報告書では、その評価結果および対応策について記載している。外部評価委員（5名）の方々には、ご多忙にもかかわらず多くの資料にお目通しいただき、多方面にわたる的確なご意見やご指摘をいただいたことに心より感謝申し上げます。

2018年度の自己評価（DP達成度のアセスメント方法）に関する外部評価の結果としては、大学全体として、「期待される水準を上回る」35%、「期待される水準である」52%、「期待される水準を下回る」13%であり、高い評価を受けることができた。また、学部別にみると、分野別認証評価に取り組んでいる薬学部および理工学部では、ほとんどの学科において「期待される水準である」以上の評価を得た。一方、外国語学部および経済学部では「期待される水準を下回る」と回答した評価者が他学部よりも若干多いとの結果であった。また、外部評価者の意見として、①DP毎にチェック表やルーブリック表などを用いた具体的なアセスメント基準を設けていること、②段階を踏んだ学修成果と指導のプロセスを明確にすること、③評価内容が学生に明確に示されていること、④第三者に対して、DPの正当性を示していることなどが重要であるとの指摘があった。これらの指摘を含めて各学部・学科への個別意見に対する今後の対応について検討し、本報告書に明記している。

今後、これらの外部評価者の多様な指摘を踏まえた上で、さらなる磨きをかけた学修成果の可視化に基づいた教育の質保証を確立するとともに、中長期ビジョンを軸に据えて内部質保証体制を強化し、本学が「世のため、人のため、地域のため」（「建学の精神」の抜粋）の人材育成に取り組んでいることを社会に立証できるように努める所存である。

以上

1. 外部評価実施概要

(1) 評価日、評価方法、評価結果に至る活動プロセス

2018年 10月 6日	2018年度外部評価員からの意見・評価会
2019年 3月～4月	各学部・学科のディプロマ・ポリシー達成度のアセスメント方法に関する外部評価員への意見・評価回答依頼(2018年度自己点検・評価活動の一環として)
2019年 5月～12月	意見・評価回答を踏まえ、検証・改善に向けた学内PDCAサイクル活動
2020年 1月～3月	報告書の作成、完成

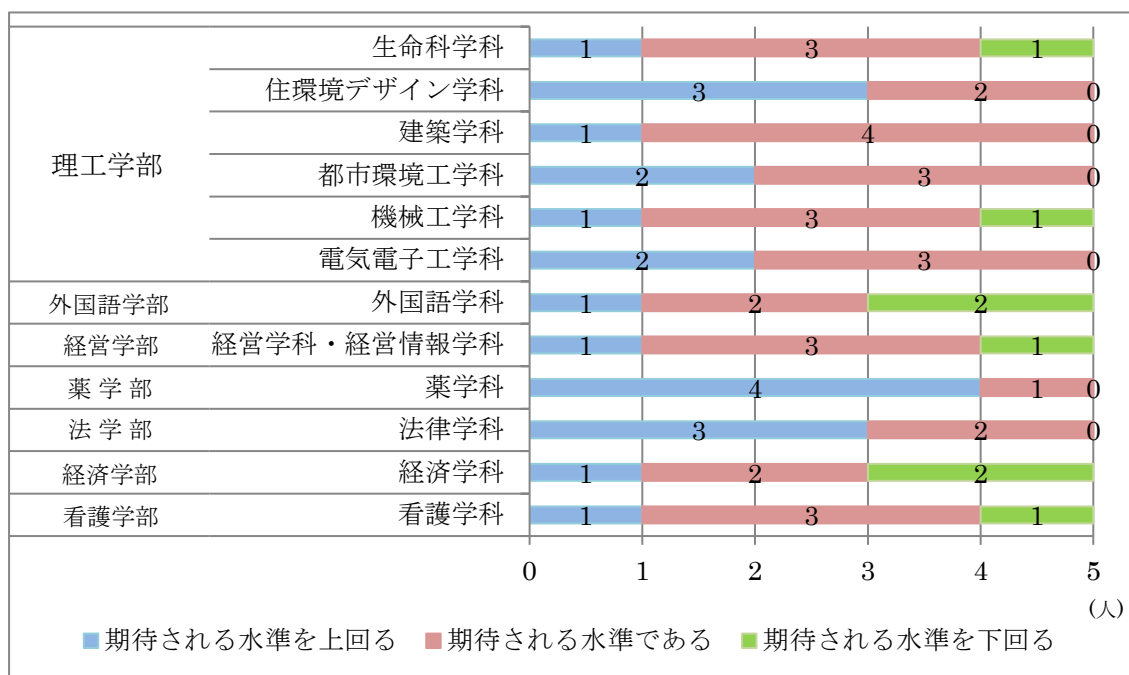
(2) 評価者

外部評価員 5名 (高校教員 1名、保護者 1名、行政職 2名、卒業生 (企業) 1名)

※「3 ポリシー」の点検・評価活動を踏まえ、『入口 (入試)』『中身 (教学・学生生活)』『出口 (就職)』の切り口・分野から選出。

2. 外部評価員による総評

(1) 外部評価結果



(2) 評価の理由、ご意見等

評価者	A
<p>薬学科、法律学科の評価基準は DP を基に作成され、すべての項目を明示的に示していることから、評価を高くさせていただきました。その他の学科は、DP を部分的に踏まえてはいますが、それを基にした評価資料とはなっていませんでした。</p> <p>評価の着眼点は様々であるとは思いますが、大学として卒業認定・学位授与の方針と</p>	

して DP を掲げているのであれば、まずはその項目を基準としつつ、そこからそれぞれの着眼点に落とし込むような評価にすることで、学生や対外的にもわかりやすいものとなると思います。そうすることで、大学が目指す能力を備えた人物とするための教育が行われていることが論理的に示されることとなると思います。

評価者 B

「卒業研究」の成績評価に際して、各視点の到達段階でのあるべき項目を示し、それを学生に事前に示すことは教育の観点から極めて重要である。同時に、評価される学生たちに、評価基準についての明確な説明を事前に行うことも重要である。その点で、貴学の各学部が、評価指標となる「学習・教育到達目標（ループリック）」を策定して厳正な評価を試みている姿勢を高く評価したい。なお、評価の際には評価基準の精度を高め、同じ学部の中で評価者全員の評価方法が統一されていることが望ましい。その点で外国語学部に対してやや厳しい見方をしたが、学部自らが客観的かつ厳正に自己評価を行う姿勢を評価したい。貴学に対する本校卒業生の満足度は高く、今後も良い関係の継続をお願いしたい。

評価者 C

卒業研究の評価は、各学部が主にループリック評価、その他独自基準等、評価基準が明確にされている。経済学部もループリック評価と基準は明確ではありますが、もう少し詳細な判定理由説明があれば更に良かったと思います。

1回生の時に、教養を身に付ける事の重要性、読書の重要性などを教え、学生時代に最も注力した事は専門知識等も含め、勉学であるという学生の育成が重要だと思います。既に読書については独自の取り組みをなされているので、更に発展・進化されます事を期待しております。

評価者 D

自己点検においては、チェック表を用い、外部評価において各学部の取組がより容易に点検できるようにされたい。

特に、各学部の判定理由の記載レベルに大きな差が見られたことから、同内容からは各基準が明確か、学生に明示されているか、評価に際し、複数人物による評価が取り入れられているかなどの読みとりにくい状況があった。

文章ではなく、チェック表で取組状況をより明らかにすることでその達成度を判定する手法等を検討されたい。

学生にとって、卒業研究は共通事項であるが、各学部で評価に対する基準の有無や周知レベルに差異があることは公平でない。

学内統一のクリアすべき基準を明確に定め、全学部が一定レベルをクリアするようスピード感をもって対応する必要がある。

評価者	E
<p>各学部からの自己点検・評価書を確認、その上でディプロマ・ポリシー(卒業認定・学位授与)における教育の質保証を展開する上での PDCA を実践しているかでの確認をしました。添付頂いている計画、評価方法、評価内容(中間審査、卒業審査)が充実しているかどうか、に重点を置き確認させて頂き、第三者として理解出来るかどうかにて、記載いたしました。</p> <p>ポイント：</p> <ul style="list-style-type: none"> ①段階を踏んで指導、評価、学生の理解・確認、最終評価のプロセスが見えるか。 ②評価する内容が明確か、また被評価者への明示・理解させているか。 ③第三者に対し、ディプロマ・ポリシー（資格認定）の正当性をしっかり訴えているか。 <p>残念ながら、一部学部で評価シートのみ、または、学部の判別に苦しむ資料もあり、学部間での認識、添付資料の統一等、バラツキが有る様に思えます。</p>	

補足意見

<p>①摂南大学としてディプロマ・ポリシーの記載が無かったので、各学部での評価基準が合っているのか判断できず、的外れな外部評価と成ってしまったのではと心配します。</p> <p>②各学部での専門性、学習内容が違うこともあり、評価方法、内容での統一された物差しが不透明な事、外部評価するに当たっての添付資料の内容、ボリュームでの差が大きい事。カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーとディプロマ・ポリシーとの区別が明確に成っていない学部もある。</p> <p>③第三者、第三者、監査を想定しての準備が各学部に対し、周知徹底が弱かったのか？審査・監査承認を受ける為の認識・準備にバラツキが有る様に感じました。</p> <p>私共、私企業では、ISO 審査会社、上場・非上場の顧客からの品質監査、クレーム対応を徹底的に受ける中、監査担当者を納得させるよりも、その上司、品質保証部門に対して、説得性のある資料を用意する事に注力しています。</p> <p>不具合に対しての課題抽出、改善プロセスから、効果の確認、横展開、再発防止策等、を準備する必要上、各製造部門長、現場責任者への周知徹底と、審査・監査官への統一した資料作成、(相手に何を訴えるのか)に毎回、苦慮しています。</p> <p>物作りと、人材育成との違い有ると思いますが、審査、監査を受ける要領、コツでは、似た物が有ると思います。</p>

3. 外部評価結果を受けての各学部・学科の所見、改善策

■理工学部

生命科学科	
所見	改善策
<p>DPを踏まえた卒業研究の評価基準は、外部評価委員5名のうち1名から「期待される水準を下回る」と評価された。生命科学科の卒研発表では、ルーブリックを用いて、パフォーマンスだけでなく、本学科を卒業するに値するか否かを総合的に評価しており、評価者と被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化ができていながらもかわらなく、説明不足により外部の方から見えづらくなっていたものと考えられる。</p> <p>また、評価委員から評価基準等を統一すべきとのコメントがあったが、生命科学科が属する理学は自然界の基本法則を探求する学問で、工学はそれを利用して人類の幸福に資する技術を創出する学問である。また、理系、文系の違いにおいてもDPが異なることから、すべての評価基準を統一することは難しいと考える。</p> <p>本評価の根拠(無記名のため)がわからないと改善できないが、各委員の評価の理由や意見の内容を基に、評価基準(評価シート)やその運用(学生に対する周知、複数教員による評価など)の不明瞭な部分を抽出した。</p>	<p>卒業研究では、実験の計画と実施及び卒業論文の作成(日頃の取り組み)、ゼミ単位の間報告会の実施(研究プロセス)、実験結果に基づいたパワーポイントまたはポスターによるプレゼンテーション(口頭発表)を軸としたパフォーマンス評価を採用している。これらの評価基準について再検討したところ、評価者に分かりにくかった(不明瞭な)と思われる部分が2ヶ所見つかった。以下にそれらの項目と改善点を述べる。</p> <p>①日頃の取り組みと研究プロセスの評価基準：実験ノートの記載内容と各研究室における中間報告会に基づいた観点(ルーブリック)をそれぞれ追加する。</p> <p>②卒研発表の評価基準(DP-Vの評価基準、複数教員による評価)：DP-V1またはDP-V2の各コースにあてはまる観点をルーブリックに追加すると共に、実際に行っている複数の教員による評価が外部にも分かるように評価シート(成績表)を修正する。なお、これらの評価基準(ルーブリック)は、これまでと同様、学生には事前に告知する。</p>

住環境デザイン学科	
所見	改善策
<p>「2018年度摂南大学自己点検・評価に対する外部評価結果」では、本学科は、薬学部薬学科に次ぐ高い評価を得た。特に、卒業研究の評価においてルーブリック評価を導入し、基準を明確にしている点において、学科の独自性がある。ルーブリック評価には、次の5</p>	<p>ルーブリックによる卒業研究評価の枠組みは、2017年度に構築したところであり、当面は現在の評価方式を継続したいと考えている。しかし一方で、現評価の主査・副査は、同じ研究分野に属する教員で構成されているため、住環境デザインという幅の広い学</p>

<p>項目を評価基準として設定している。</p> <p>①目標の新規性・明確性・妥当性→デザイン力</p> <p>②既存の知識への精通と理解→自主学習力</p> <p>③論理と方法論の適切な組立→知識の再構築</p> <p>④計画力と推進力→計画推進力</p> <p>⑤発表技術→コミュニケーション・デザイン力</p> <p>ルーブリック評価は、中間、最終の2段階で主査および副査を設けて評価を行うとともに、教育改善委員会（学科会議）において学科教員全員で情報を共有し、客観的、かつ厳正に精査している。</p> <p>また、その他の演習科目では、非常勤講師の方々にも専任と同様に成績評価を行ってもらい、学生自身に発表の機会を与えて公開の場で講評を行っているなど、全員への周知を心がけている。</p> <p>4年間の総括として、本学科では大学外において、毎年卒業研究展を開催している。ここでは、学生が外部の評価を直接聞くことができる機会であり、成長の様子を窺い知ることができる。2019年2月に開催した2018年度卒業展への訪問者は600名を超え、過去最多であった。</p>	<p>術分野の卒業研究であることを鑑みて、より多角的な評価を行う必要があると考えている。</p> <p>この点を今後の改善策とし、卒業研究をはじめ、多様な科目において、研究分野の異なる教員が互いに意見を出し合い、より厳正、かつ多方面からの審査が行えるように図っていきたい。</p>
--	--

建築学科	
所見	改善策
<p>「DPを踏まえた卒業研究の評価基準の構築およびその厳正な適用」に関する評価結果について、評価委員5名のうち4名より「期待される水準」、1名より「水準を上回る」との評価をいただいた。「水準を上回る」との評価が少なかったことから、DPに即した評価基準および具体的な指標がより明確に把握でき</p>	<p>卒業研究の学習・教育到達目標と建築学科DPの関係が明確に見て取れる工夫をするとともに、学生諸君への周知の方法も改善したい。また、関連科目との関わりや卒業研究の評価基準が、建築学科DPをどのように反映したものであるかを把握し易い評価指標に改善していく。具体的な評価指標は、DPを</p>

<p>る仕組みを整える必要があると考える。</p> <p>卒業研究においては、前年度末の履修ガイダンスや当該年度に定期的で開催する「卒業研究全体会」、卒研ゼミ、中間・最終発表審査会などにおいて、到達目標、評価基準、成果物等について学生への周知をはかっているものの、どのように DP を踏まえた評価基準となっているか、具体的な評価指標については現時点のものでは十分に把握できるものになっていない部分がある。評価方法のプロセスも改善の余地があると思われる。</p> <p>卒業研究にあっては、シラバスに示された建築学科卒業研究の学習・教育到達目標（DP 同等）に照らした評価基準の達成度に対し、学科専任教員全員による評価を行っているが、学科 DP、卒研シラバス、卒研評価シートなどの資料からは、DP を踏まえた評価基準をどのように評価に適用しているかわかりにくい部分がある。</p>	<p>踏まえたものであることが直感的にわかるようにするだけでなく、達成度やその変化を捉えやすいものになるよう工夫を考えたい。</p> <p>さらに、学生・教員が双方に確認しあう機会を増やしたい。</p>
---	---

機械工学科	
所見	改善策
<p>5名による評価結果では、期待される水準を「上回る」および「下回る」がそれぞれ1名、残り3名は「期待される水準」であった。理工学部のうち3学科は「下回る」が付いておらず、M科は理工学部全体から見ると、評価は若干下がるようである。審査では1)指導、評価、学生への理解・確認、最終評価に至るプロセスの明確性、2)評価内容の明確性、3)学生への評価の明示・理解がポイントであると指摘している。</p> <p>評価基準は DP に基づいて設計されており、また、卒業研究の取り組み方と評価方法（評価項目と配点）をガイダンスや研究室活動を通じて学生に周知している。種々の卒研発表</p>	<p>以下の三つの改善策を講じる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 卒業研究の指導プロセス（指導の方法と内容）の教員間での意識と情報の共有化（再確認）を行い、そのプロセスに沿った指導を行う。 日々の卒業研究活動の客観的評価と、その（エビデンスたり得る）活動資料を保管する。 <p>以上について、学科内教育改善委員会にて継続的に議論する。</p>

<p>会で利用するルーブリック評価の内容についても公開しており、指導から最終評価に至るまでプロセスの透明性は確保されている。したがって、外部評価がやや低い理由として、資料や説明が不足していたことが考えられる。</p>	
--	--

電気電子工学科	
所見	改善策
<p>E科に関しては、評価委員5名のうち3名より「期待される水準」、2名より「期待される水準を上回る」と評価いただいた。期待される水準を上回るとの判定が少なかったが、自己点検の判定理由の説明が不十分であったと考えられる。卒業研究の学習・到達目標はE3のデザイン能力を当てている。しかし、卒業研究の評価には、狭い意味のデザイン能力と関連しない項目、卒論の文章表現や卒業研究への取り組み態度などを含んでいるため、DPと評価基準の整合性がとれていないことが問題であったと思われる。また、このことが外部評価委員の方々や学生にとってもわかりづらくなっている原因であると考えられる。</p>	<p>今後、DPと卒業研究の評価基準の関係を見直し、DPを踏まえた評価基準となるよう定め直す必要がある。現状においてルーブリック評価を行っている「取組状況」、「報告書」、「発表会」については、DP-E1の実験・データ解析能力、DP-H1、DP-H2の業務推進・協働能力、DP-Fのコミュニケーション能力などを踏まえた評価基準となっている。</p> <p>このような卒業研究の学習・到達目標と評価方法の整合性については、今後、必要により整理しなおすことを検討する。また、使用中の卒業研究評価用ルーブリック表を、必要により見直して改善を続ける。</p>

都市環境工学科	
所見	改善策
<p>期待される水準を上回らなかったのは、当学科からの説明が不足していたことが一因と思われます。外部評価結果でご指摘いただいた内容では、特に次の観点は重要であり、当学科でも卒業研究の指導に取り込んでいるところです。</p> <p>1)DPに対応した評価の着眼点を学生と共有できるものとする。</p> <p>2)上記を達成する一手段として、評価基準に関して学生に事前に説明する。</p>	<p>左記1)~4)に対して、次のような教育改善を進めています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業研究における学生の自己評価を年度の中間で実施し、評価の着眼点の共有を図るとともに、学生への評価基準の説明の機会を増やす。 ・審査発表会での審査項目を細分化し、より明確でわかりやすい基準とする。 ・評価精度の向上に必要となる審査基準の明確化については、2019年度に継続して調

<p>3)評価の精度を高め、評価者全体の評価方法が統一される。</p> <p>4)段階を踏んだ指導、確認、最終評価を実践する。</p> <p>上記の観点について、今後もさらに教育改善を進めていく予定です。</p>	<p>査を実施し、その結果を踏まえて検討するといった PDCA サイクルの下で改善する。</p>
--	--

■外国語学部

所見	改善策
<p>卒業研究は4年間の学修の総仕上げ、「集大成」である。最終的に「卒業研究レポート」という形になれば、その学生が大学で何を学んできたのか、何を研究してきたのかが一目瞭然になり、より一層の具体性を持つことになる。集大成としての卒業研究レポートを完成させることによって、「自分はこの学部でこんな研究をしてきた。」という達成感や満足感を得ることができ、これから社会人として新たなステップを踏む自信にも繋がる。</p> <p>そのためにも、卒業研究の評価基準はディプロマ・ポリシーに定める項目が適切に反映されていることが必要であり、その内容についても学生にわかりやすいものでなければならぬし、評価方法に関しても事前に明確に説明を行う必要がある。</p> <p>そうすることにより、外国語学部が求める“語学力に加えて異なる文化や価値観への深い理解を備えた人”を育成するための教育がなされたのかどうか客観的にも示されることになると思う。</p>	<p>外国語学部が求める人物像“語学力に加えて異なる文化や価値観への深い理解を備えた人”とディプロマ・ポリシーに定める各項目の関連性の検証、ひいてはカリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーなど連続性のあるものになっているのかを今一度再点検するなどの対応が必要である。</p>

■経営学部

経営学科・経営情報学科	
所見	改善策
<p>一昨年度において経営学部としてルーブリック評価表を作成し、2018年度については、卒業論文を対象に、試行的に評価の一部とし</p>	<p>昨年度の試行をへて、以下のような意見があった。</p> <p>(1)5つの側面の配点(100点満点の〇〇点)</p>

<p>て導入した。卒業論文を対象に①問題設定、②先行研究、③論理性、④表現、⑤結論の 5 の側面について、それぞれ 4 段階で評価し、このルーブリック評価と卒論中間発表会、最終発表会、レポート課題等の評価を加算し、各教員が、総合的に評価するものであった。</p>	<p>が妥当といえるか。</p> <p>(2)②先行研究に 100 点満点の 20 点というかなりの配分がなされているが、学部学生には、先行文献の把握・整理を期待するのは難しいのではないか。</p> <p>(3)全体として、すべての側面に対する評価水準が高すぎるのではないか。</p> <p>(4)各側面・各段階に対する説明が抽象的で分かりづらく、学部 DP との関連性が明示されていない。</p> <p>(5)学部 DP3、および DP5 で求められているコミュニケーション能力が独立項目として明示されていない。「表現」という評価項目はあるが、文章化に限定されている。</p> <p>これらの指摘を踏まえ、本年度において、学部教務委員会を中心にルーブリック評価表の修正・改定作業を実施しており、2019 年 6 月に学部教員に修正案が提示され意見を集約し、2019 年中には、学部教授会で審議し、2020 年度からは修正されたルーブリックで評価する予定である。</p>
---	---

■薬学部

所見	改善策
<p>薬学部におけるディプロマ・ポリシー (DP) は薬学教育モデルコア・カリキュラムを基本として、本学独自の教育を加えて作成したものである。</p> <p>薬学部は早期より、DP への到達を重視するアウトカム基盤型教育への対応を目指してきた。DP が定める卒業時の要件を評価するパフォーマンス評価の基準となるルーブリックを 8 つの DP のうち 4 つに策定し、学年縦断的かつ経年的な学生の自己評価を実施してきた。また、卒業研究を重視する薬学部の文化に沿</p>	<p>薬学部は 2018 年度に学士力アセスメント委員会によりアセスメント・ポリシー (AP) を作成、また AP を可視化するためのアセスメント・マップを作成した。この AP に基づいた学士力アセスメントを行うため、2 年次、4 年次、6 年次の終了時にパフォーマンス評価を基盤とした学生の能力の到達度を測定していくプログラム(資料 1)を作成し、2019 年度に試行する。</p> <p>アセスメントプログラムは現行の教育プログラムとの整合性や運用の現実性、また急</p>

<p>った、卒業研究を介した教員と学生の密な教育体制の中で学生の DP への到達を観察する、卒業研究の評価基準としてのルーブリックも活用し、これらのデータによる IR を続けてきた。</p> <p>実際に評価をおこない、現行のルーブリックの秀でた点や問題点が明らかになったこと、また平成 25 年度に改定された薬学教育モデルコア・カリキュラムへの対応なども合わせて、DP 到達へのルーブリックの改訂、卒業研究評価ルーブリックの改訂計画が必要であるという認識で、アセスメント・ポリシー(AP)作成も含めた評価系の見直しを進めている。</p>	<p>激な改革に伴う学生・教職員の混乱を避けるため、従来の科目単位の評価を基盤としつつ、学生の学習成果を総合的に測定するプログラムとしている。また、同時にこれまでの DP への到達の評価の中心的な役割を果たしていた卒業研究の評価におけるルーブリックの見直しも行っている（資料 2）。8 つの DP のうち残りの 4 つの DP についても 2019 年度中にルーブリックを策定する。</p>
---	---

■ 法学部

所見	改善策
<p>法学部では、法学・政治学・法政策学に関する専門知識を習得し、それを活用して論理的な問題解決能力を身につけることを「DP」の主眼としているが、4年間の集大成を卒業研究で評価することの難しさを実感している。専門分野が多岐にわたるためにより厳格な評価基準を作ることは容易ではないが、改善を重ね、さらに、外部評価者の方が指摘されているように、学生への周知を高めてより厳正な評価を目指していく。</p>	<p>卒業研究は、学びの集大成であるが、他方で専門分野が大きく異なるゼミ担当教員の指導を受けて卒業研究論文が作成されるため、書式や研究倫理などの点を除くと、必ずしも学部全体で統一された評価が行われていない。しかし、紛争や問題を論理的に解決できる能力を目標とする点は一致しているのであって、卒業研究の成果を現在の論文形式から展開することも視野に入れて「質の保証」を高める努力を重ねていきたい。</p>

■ 経済学部

所見	改善策
<p>経済学部においては、「経済学を基礎として幅広い見識と豊かな人間性を有し、現代の経済社会の諸問題に積極的に取り組むことができる知的・専門的経済人を養成する」ことを目的として DP を作成し、これに沿った教育を実施してきた。あわせて、カリキュラム・マップ、カリキュラム・アセスメント・ポリシーを作成するとともに、その過程の一部検</p>	<p>左記のような DP に関する PDCA サイクルを設定しているが、こうした DP による教育を全教員が徹底しているとは言い難い。このこともあって、プレゼン大会、卒論発表大会にしても、参加する学生数は多いとはいえない。このため、全教員にさらなる参加を呼び掛ける他、卒業論文のルーブリック評価に関する認識の統一を図りたい。その際、評価基</p>

<p>証として毎年、ゼミ対抗プレゼン大会、経済実践演習報告会を実施している。さらに各ゼミにおいては、各学生が参加する形式により、質の保証ができるように工夫した。加えて、学部 FD 委員会主催による学生との懇談会を毎年開催し、授業等にかかる事項について学生からの意見もヒアリングしている。</p> <p>さらに、卒業論文の評価については、評価基準を明確化、2018 年度は試行段階として、2 つのゼミにおいてルーブリック評価を行った。また、卒業時には 4 年間を通しての学習成果に関するアンケートを実施、その結果を次年度の点検に用いることにより、PDCA サイクルの充実を図っている。なお、同時に、1～3 年の在学学生に対しても同様のアンケート調査を行っており、DP の進捗状況の確認を行っている。</p>	<p>準が曖昧であれば、評価の公平性という観点から効果的とは言い難い。とりわけ卒業論文の評価を行うのか、あるいは卒業論文執筆に至る過程をも評価するのかについて、判断が分かれていた。ただ、これについては、卒業論文に至る過程も評価することで方針が確定した。今後、随時、部内で講習会などを開催することなどを通じて、こうした点の改善を図りながら、次年度は全教員が卒業論文のルーブリック評価を行うという体制を構築し、DP に関する PDCA サイクルが機能するような体制を固めることに努力したい。</p>
--	---

■看護学部

所見	改善策
<p>看護学部ではルーブリック表を用いて卒業研究を評価していますが、2018 年度自己点検・評価書には、学部の掲げている DP のどの項目に基づき、何を評価しているのかを明確に示すことができていませんでした。卒業研究ではどの DP を測定するのかを学生・教員に明確にし、理解を深める必要があると考えます。学生・教員および第三者に対し、卒業研究のルーブリック評価項目と DP とのつながりを明確にわかりやすいものとする事で、教育の質を保証し、学部が目指している看護職の育成を実現していきたいと考えます。</p> <p>また、評価基準、評価項目だけでなく、学生への指導のプロセス、評価基準の明示方法について、どのような資料を用いて、どのよ</p>	<p>1. DP と卒業研究のつながりの明確化</p> <p>卒業研究では 8 つの DP のうち、主に DP3 「科学的根拠に基づく問題解決能力」、DP4 「生命の尊厳と人権の尊重を基盤とした倫理観」、DP6 「看護の発展に貢献する学習意欲・自己研鑽の姿勢」を評価しています。DP3 については、自らの研究課題を見出し、エビデンスとなる文献から課題解決に向け研究計画を立案し、実施するプロセスについて、指導教員が指導を行っています。DP4 については、研究を進める中で、研究の対象者に対する倫理や研究倫理を指導しながら進め、将来の看護者としての倫理観を育てています。DP6 については、教員が指導の過程で、学生の研究に対する取り組み内容や姿勢等を観察し評価します。また評価は研究への取り組</p>

<p>うに実施しているかについて、根拠となる添付資料も不十分でした。</p> <p>以上のことから、ルーブリック評価表の改訂等を行い、DP とのつながりを明確にし、より厳正な評価を目指していく。</p>	<p>みのプロセスと研究の成果物から学生による自己評価および教員による評価を行うことを、研究開始のオリエンテーション時に教員から全学生に評価表を用いて説明を行います。</p> <p>2. 卒業研究手引き書の作成</p> <p>卒業研究の目的、研究発表および論文作成方法および評価内容に至るまでの一連の内容やプロセスへの理解を深めるため、「研究の手引き書」の改定を行い、対象となる学生全員にオリエンテーションを実施し、配布しました。</p> <p>3. 卒業研究ルーブリック評価表の改訂</p> <p>評価表を2年間使用した結果を踏まえ、学生・教員にとってのわかりやすさや評価のしやすさを検討し、評価項目と評価基準を修正し、2019年度から改訂版を使用しています。</p>
---	---

以 上